
毒島さんと呼ばないで

田中かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒島さんと呼ばないで

【Nコード】

N1346C

【作者名】

田中かなた

【あらすじ】

不細工・チビ・根暗・何考えてんのかわかんない。沢山の薬物毒物だけが友達の危険人物、ブスジマキニコ毒島君子。友達なんか欲しくないけど、ブス島とは呼ぶな。マナーのなっていない奴にはよく効く薬を処方してやる！でも本当は寂しがり。そんな毒島さんの物語です。

第一話 白いマスクの女

昔々、というほどでもないわりかし最近のお話。 あるところに一人の女の子がおりました。

彼女の名前は毒島^{ぶすじまきみし}君子。 16歳の高校二年生です。

毒島さんはかわいい女の子ではありませんでした。 それはもう全くかわいそうなぐらいかわいくありませんでした。

133センチという異常な低身長に加え、俯きがちなので背の高い人は毒島さんの髪の毛しか見えません。 その髪はとんでもなく力タイ髪質で、頭に大きなタワシでも乗っけてるみたいです。 比較的低い身長の方は毒島さんの顔を拝むことができますが、ひどいニキビ顔に生まれつきの非常にキツイ目つきをしていて、見るだけなんだか気分が悪くなってきました。 だから誰も彼女の顔を覗き込もうとはしません。

毒島さんは自分がかわいくないことを知っていました。 そしてそれを大変コンプレックスに思っていました。 そこで髪を伸ばして顔を隠したり、年中風邪を引いているみたいにマスクをして登校したりしているのですが、それはむしろさらに彼女の不気味さをパワーアップさせていました。

毒島さんには友達がいませんでした。 毒島さんより不細工な子でもたくさん友達のいる子はいるけど、毒島さんは独りでした。 それは多分毒島さんの性格に原因があるのでしょうが、本人は自分が可愛くないからだと思っていていませんでした。 そこで毒島さんはますます殻にこもった性格になり、それがさらに人を遠ざける結果に繋がりました。

見事な悪循環ができました。

この悪循環はかれこれ10年近く(毒島さんが小学校に入学した

頃から）続いていて、今では毒島さんは立派な一匹狼になってしまっていました。

そんな毒島さんの唯一の心の支えは、色々な種類の毒や薬物を調合することでした。

小さな頃から薬剤師のお父さんの仕事を教えてもらっていた毒島さんは、薬学方面において女子高生とは思えないほどの知識を持っていたのです。それはもう、明日にでも論文を書いて博士号を取れてもおかしくないほどの知識量でした。

その知識でもって毒島さんは、お父さんの薬品棚からお薬をこっそり頂戴したり、独自のルートから法律違反スレスレのお薬をちょっぴりと手に入れたり、時には材料を自力で採取・栽培したりして、色々な薬品を自分の手で作りました。もはや人間よりもお薬のほうがいい心を開ける友達でした。

いつしか毒島さんの部屋の隠し薬品棚（洋服ダンスの下着の奥にあるよ！）には、蓋を開けるだけで周囲数百メートルの人を眠らせたり、痕跡なく人を絶命に至らせたり、精力を異常に増強させたりするような、ちょっぴとおまわりさんには見せられないお薬が山のよつに並んでいました。

毒島さんは部屋に一人にいるとき、その棚をこっそり開けて眺めるのが何よりの楽しみでした。

第二話 学校生活は楽しい

「そつえばブス島がさー」

……得意げに話し始めたのは、クラスメイトの高森くんでした。

高森くんはお調子者で、クラスのムードメーカー的存在です。いつもなんとかしてみんなを笑わせることばかり考えているので成績はよくない方ですが、それでもクラスのみんなからはとても好かれていました。

「あいつ、ニキビを治そうと思って、自分で薬を作ったらいいんだよね。でも失敗して余計にひどくなっただよ。だけど元の顔がひどすぎて、大して変わらなかつたんだなあ、これが」

高森君が何かいうたびに、生徒たちの輪が笑い声でどつと沸きました。すると高森君はますます得意になって、次から次へと毒島さんに関する面白い話をしました。

毒島さんは、最初から全部聞いていました。

自分の席に座って、何食わぬ顔で薬草図鑑を読みながら、ちゃあんと聞き耳を立てていました。でも特に何も言いませんでした。高森君の言っていることは毒島さんにとって何の覚えも無い嘘八百ばかりだったし、いくら悪口を言われたって毒島さんは全然気にならないのです。だって毒島さんは高森君たちのことが大嫌いだったから、嫌いな相手にいくら嫌われたって別にいいんです。

高森君はすぐ近くに毒島さんが座っていることなんて全く気付かないかのようになり、いつまでも大声で話しつづけました。

「ブス島はことあるごとにこっちを見つめてくるからな。あいつ絶対俺に気があるんだぜ。怖えーっ！」

毒島さんは眉をひそめて、顔を隠すためのマスクの位置をくつと

正しました。誰も見ちゃあいませんでした。それは怒りの表情でした。

さっきも言ったように、毒島さんは高森君が大嫌いでした。高森君も高森君の友達も、高森君の家族も、親戚も、ペットも、みんなひっくるめて大嫌いでした。もし毒島さんが意図的に高森君を視界に入れることがあるとしたら、それは嫌いだから睨んでいるのです。嫌いだから悪口を言われても平気なのです。

でも、もし高森君がそれを分かっていたとしたら、それはとてもない間違いなのです。冗談だとしても許されない大きな大きな間違いなのです。だって、お互いに承知の上で憎み合うのでなければ不公平ですからね。

そんなことも分からない奴にはお仕置きが必要だな。と毒島さんは思いました。

次の日、毒島さんは小さな薬瓶と注射器を鞆の中に忍ばせて登校しました。

瓶の中には透明な液体が入っています。ラベルはありません。注射器は使い捨てではありませんが、歴とした医療用の、普通のお店では買えない代物でした。

毒島さんは全ての作業を、丁寧且つ迅速に行いました。

まず高森君が、お茶の入ったペットボトルを鞆の中にしまうのをさりげなく確認しておき、鞆の中でのボトルの位置を把握しました。それから時計を確認しました。毒島さんはあらかじめ薬の成分を調節して、投薬してから効果の出るまでの時間を計っていたのです。

それから、計算した通りの時間になると、毒島さんは薬瓶の中身を注射器に吸い上げました。毒島さんはこの感触が大好きだったので、無意識にマスクの下で微笑を浮かべました。

薬品の入った注射器を袖の中に隠し、高森君の鞆に忍び寄りませ

高森君本人は席から離れて友達と喋っていましたから、誰も毒島さんの動きに注意を払っている人はいません。

そこで毒島さんは素早く注射器を袖から滑り出させ、高森君の鞆に突き刺しました。鞆の中にあるペットボトルの確かな手ごたえを感じました。そしてその中に、注射器の中身を残らず流し込みました。

作業が終わるまで、誰一人気付いた人はいませんでした。それから毒島さんは、気分が悪くなったと言って学校を早退しました。毒島さんがこんな風に適当な理由をつけて授業をサボってしまうことはよくあることだったので、誰も不審に思いませんでした。注射器は、帰りしなに針を折って焼却炉に捨ててしまいました。

高森君が疑わずにペットボトルの中身を飲んでくれれば、それに盛られた特別製の「利尿剤」はお昼休みの前になって強烈に効果を現してくるはずでした。お昼休みの前ということは、つまりみんながお弁当を食べる直前です。毒島さんが調べた利尿剤は高森君に授業を抜けてトイレに行く隙を与えないであろうことは確実でした。自分のしたことの結果がどうなるのか、毒島さんはあえて確認しようとはしませんでした。

でもその次の日から、高森君は学校を休むようになりました。

第三話 いつものこと

高森君は学校に来なくなりしました。

何が起こったのか、あの日学校を早退していた毒島さんは知る由も無いはずでした。毒島さんが高森君に利尿剤を盛ったという証拠なんてどこにもないわけですから、高森君の不登校の原因と毒島さんを結びつけて考えることなんてできないはずです。

でも、クラスの人みんな毒島さんを疑っていました。

証拠もないのにハナから毒島さんしか疑っていませんでした。みんなが遠巻きに毒島さんを眺めながら、おびえたような顔をして、ひそひそとにか噂しています。

それはなにも今に始まったことではありませんでした。

ウサギ小屋のウサギが死んだときは毒島さんが動物実験の末に殺したことになったし、学校に大量のバツタが侵入してきた時も毒島さんが仕組んだことになりました。多分、火事が起きれば毒島さんが火をつけたことになるし、地震がおきれば毒島さんがナマズの髭を引っ張ったことになるでしょう。

……まあ実際、そういう事件の中には本当に毒島さんが引き起こしたのも少なくはなかったわけですが。

しかし、これは毒島さんにとってはいい傾向でした。

こうやって不気味がられたり、恐れられたりしているうちは、みんな毒島さんを一人にしておいてくれるのです。そうでなければ自分分はクラス中からイジめを受ける存在であることを毒島さんは分かっています。

持ち物や机を汚されたり、あるいは暴力を振るわれたりするより

は、こうして距離を置かれたが百倍いいのです。それでなくてもあんな頭の悪い連中とつるむなんて毒島さんは願い下げなわけですけどね。

それはそれとして、高森君とほぼ同時期に学校に来なくなった人がいました。川崎さんと言って、とても愛想がよくて顔も可愛い、男子からも女子からも好かれる、毒島さんと対極に位置するような女の子です。

川崎さんは高熱を出して家で寝ているらしいのです。毒島さんは彼女になにもしていませんから、多分本当に病気で熱を出しているでしょう。気味がいいなと毒島さんは思いました。

そして、やっぱりそれも毒島さんの責任になりました。

「ブス島が高森君と川崎さんに変な薬を飲ませたに違いないわ。だって二人ともクラスの人気者だから、あいつ嫉妬したのよ」

人気に嫉妬？ ありえないことです。

毒島さんはどんな罪をなすりつけられても全然構いませんが、こんな風に『本当はみんなの仲間に入りたいけど出来ない奴』扱いされることだけは許せないのです。私をお前らと同次元で考えないでくれ。

毒島さんがクラスの中心的な人物を二人も葬った（ことになった）ので、いつもは怖がって遠くから悪口を言うだけだったクラスメイトの中にも、段々不穏な空気が流れ始めました。

「俺、いくらなんでも、何もして無い奴らに毒を盛るなんて許せないな」

誰かがそう言って、何人かが同意しました。

毒島さんはそれもまた聞いていました。誰も隠そうとしないのだから聞こえて当然でした。そういう正義漢ぶった考え方には吐き気

がします。まるで自分たちは正しいということを前提にした考え。何もしてない奴に毒なんか盛るか、と毒島さんは心の中で毒づきました。

……だから、というわけではないのですが、度重なる理不尽に嫌気がさしてきたのでしよう。毒島さんは自分でも信じられないような行動に出ることにしました。その日の夕方、病気で寝ている川崎さんの家を訪れたのです。

「クラスメイトの者です。学校のプリントを届けに来ました」

そう言うと、川崎さんのお母さんはほとんど疑いもせず毒島さんを通してくれました。ただ一瞬、風邪ひき用のマスクをしている毒島さんを見て怪訝そうな顔をしただけでした。

毒島さんは大手を振って川崎さんの部屋へと入ることができました。

ベッドの上で、川崎さんが押し入ってきた強盗を見るような目で毒島さんを迎えました。パジャマ姿で、ベッドの脇にはポカリスエットが入ったコップが置かれています。

川崎さんは本当に病気のようでした。顔を見ただけで毒島さんにはその大体の症状が分かりました。そして同時にこう思いました。

ああ、この子はかわいいな。こんな顔だったら人生変わっただろうな。

「あなたの病気……私が毒を盛ったせいらしいね」

と、毒島さんは言いました。川崎さんは震えるばかりで、何も答えませんでした。

「私には何の覚えも無いけど、もし私のせいで誰かが病気になったとしたら、それはとても心苦しいし、できることならなんとかしたいと思うわけよ」

うんうんうん、と壊れた口ポットみたいな動きで川崎さんが頷きます。まるで私が脅しているみたいじゃないか。何をそんなに怖がることがあるんだ、そんな恵まれた顔をして。

毒島さんはそんな風に思っていることを少しも顔には出さず、マスクの下で不気味な微笑を浮かべながら、川崎さんにいくつか質問をしました。

熱はどれぐらいあるのか。

咳は出るか。

下痢は？ 他の症状は？

のどの奥を見せなさい。

毒島さんのお医者様気取りの尋問に、川崎さんは言われるがままに答えました。診断が終わると、毒島さんは持ってきた鞆を開けました。その中には大小さまざまな薬瓶が入っていて、その中から、同じ形をした三本の細長い薬瓶が取り出されました。またしても瓶にラベルはなく、中は透明な液体に満たされています。

「毎食後、瓶の半分ずつ飲みなさい。医者にもらった薬があったら捨てなさい。その瓶がなくなるまでには全快しているから」

川崎さんはその瓶を受け取るうとはしませんでしたが、毒島さんは構わずポカリスエットの脇に三つの瓶を並べました。

そして、毒島さんはまだ怯えて震えている川崎さんにさっさと背を向けました。でもドアを開けて部屋を出る前に、思い出したように振り返り、もう何年も人前で外したことの無いマスクを取りました。そうして針金みたいな前髪もどけると、部屋の明かりに照らされて、毒島さんの可愛くない顔がはっきりと見えました。

川崎さんが、息も出来ないほど驚いているのが遠くからでもわかりました。

無理もない、あんたはこんな醜いもの、後にも先にも見たことが無いだろうからね。そう思いながら毒島さんは、にっこりと微笑んでこう言いました。

「お大事に……」

第四話 育ちのいい娘

毒島さんがあげたお薬の効果は靨面でした。

川崎さんは次の日の朝には、もう学校に来れるようになっていました。

「お帰り！ 病気はもういいの？」

「うん……ただの風邪だったし……」

数日振りに帰ってきた川崎さんの周りに、心配する女の子たちの人だかりができています。

川崎さんは殆ど何事もなかったかのように復帰しました。もちろん毒島さんに薬のお礼なんか言いに来ません。でも毒島さんは満足でした。毒島さんはもう自分が納得のいくようにやっただけです。川崎さんの病気を治したことで、川崎さんの人気に嫉妬して毒を盛ったという、あの不名誉な噂を否定することが出来ました。たとえばの誰もそのことに気がつかなくても、自分を納得させることが出来たのもういいのです。

「川崎さん、ちょっといい？」

数人の男女が、川崎さん呼びました。

そして何やら固まって話し合いを始めたようです。毒島さんはその話には興味がなかったので少しも聞いていませんでしたが、その内容はこうでした。

「川崎さん、病気になる前、何か変なもの食べたり、飲まされたりしなかった？」

「……どういうこと？」

川崎さん呼び出したのは、毒島さんが毒を盛ったせいで川崎さんが熱を出したという説を本気で信じているグループだったのです。彼らは川崎さんに、毒島さんに何か食べ物をもらったり、怪しい薬

を打たれたりしていないかということをしつこく聞きました。

「まさか、そんなはずないよ」

川崎さんはそれを否定しました。

「私は毒島さんにもらった薬のお陰で治ったんだもん」

それを聞くと、グループのみんなの表情が変わりました。まさか。そんなわけない。どういうことだ？ ありえない。何かの間違いだ。元々グループの中にいなかったクラスメイトたちも騒ぎを聞いて集まりだし、ちょっとした人ばかりが教室の真ん中にできました。

毒島さんは勿論、その集まりとは遠く離れたところにいましたし、騒ぎが大きくなっても少しも興味を示しませんでした。

川崎さんは、出来事の一部始終を皆に語って聞かせました。

「毒島さんは濡れ衣を払うために、私に薬を用意してくれたの」
でもみんな、なかなかそれを信じようとはしません。

誰かが言いました。

「自分で毒を盛って、自分で解毒したんじゃないの？」

その考えはすぐに皆に受け入れられました。

そうだ、それだ。それっぽい。あいつの考えそうなことだ。なんてひどい。川崎さんに恩を着せようという腹ね。手柄を上げて皆に認められたかったってとこかしら。何考えてんだ。頭おかしいぞ。でもそう考えると納得がいく。間違いない。そうに決まってる。

川崎さんも馬鹿だね。あんなこと言っただって誰も聞くわけないんだからさ。

と、毒島さんは思いました。

「いいかげんにしなよ！」

川崎さんは大声で叫びました。

「みんなおかしいよ！ 毒島さんが何したってどういうの？ 私の病気

を治してくれたんじゃない！ それなのにそんな言い方ひどいよ！」
みんな黙りました。

そしてそれぞれ顔を見合わせました。次にその視線がもう一度川崎さんに向けられたとき、その目は何か幽霊や宇宙人のような、理解できないものを見る目になっていました。

むかつく。と毒島さんは小声で毒づきました。

お前のような正義ヅラした奴が一番腹が立つ。やっぱりあの時まともな薬なんか渡さずに、毒殺してやればよかったかもしれないな。そうすれば少なくとも、こんな不快な思いはしなかつたらうに。

毒島さんは黙って席を立ち、制鞆を手に取りました。そのまま誰にも何も言わず、家に帰ろうと思いました。

帰ろう。帰って薬棚でも眺めよう。それとも今日は何か新しい薬を作ろうかな。へへへ。

教室を出た毒島さんの背中に、川崎さんがもう一度叫ぶのが聞こえました。

「毒島さんは何も悪くない！！」

第五話 ひよっとして

「待って！」

人より早めに家路をたどる毒島さんの後ろから、女の子が駆ける可愛らしい足音が聞こえました。毒島さんはもう、その足音と声を聞くだけでも不快になりました。

「待ってよ！ 一緒に帰りましょう」

毒島さんは立ち止まりませんでした。走って逃げることもしませんでした。振り返ることも話に耳を傾けることもなく、徹底的に無視を決め込みました。

可愛い足音はすぐに毒島さんに追いつき、そして前に立って進路を阻みました。

「お礼を言わなくちゃいけないと思って」

はあはあと息を切らしながら、そこに川崎さんが立っていました。手には毒島さんと同じように鞆を提げています。

「学校、まだ終わってないよ」

「そんなのいいのよ」

毒島さんの知る限り、川崎さんが授業をサボったのはこれが始めてでした。

「あの薬、本当によく効いたの。三本ももらっちゃったけど、一本目がなくなる前にもう元気になったわ。ありがとう！」

毒島さんは答えませんでした。無視して通り過ぎようとするものの、川崎さんは毒島さんの歩く早さに合わせてピッタリくっついて歩きます。

毒島さんは腹が立って、だんだん歩く速度が早くなって来ました。ああむかつく。まずその顔が気に食わない。この世の幸せ全部独り占めにしたような顔して、しれっとしていやがる。病気になるったらクラス中に心配してもらって、おまけに弱いものの味方か。何だ

その美少女ゲームのヒロインみたいな役作りは。お前みたいな奴は騙した男に刺されて死んでしまえ。

「だからね、どうしてもお礼がしたいの。私がおごるから、ねっ、一緒に入ろうよ。ねっ」

気がつくと、毒島さんは駅近くのファーストフード店の前まで来ていました。

「入るってここ？ あんたと？」
「冗談じゃありません。」

昼下がりのハンバーガーショップです。頭の軽い女子高生どもが増えすぎたハムスターみたいに群れをなしてそこらじゅうできゃいきゃい言っているようなこの空間に、陰気な毒島さんが吸っていい空気はビニール袋一杯分も無いんです。毒島さんは生まれてから一度もこの手の店に入ったことはありません。ハンバーガー屋もドーナツ屋もファミレスでさえもです。だってこんなところに入ったら窒息してしまうもの。

「ふざけんな。早く帰りたいんだよ」

「そんなこと言わないで！ なんでもいくらでも食べてイイから！」
毒島さんは川崎さんを振り払って帰ろうとしましたが、なにぶん体がちっちゃいので殆ど抱きかかえられるようにして店の中に連れ込まれてしまいました。

「いらっしやいませ！ こちらの席へどうぞ！」

席まで通されてしまうと、さすがの毒島さんも観念せざるをえませんでした。居心地悪そうにソファアの隅っこに位置取ると、窓の外に目を向けて、ムスツとしながら通行人の数でも数え始めます。

「毒島さん何食べたい？ 新発売の味噌カツバーガーがあるの！ 私これ食べてみたいな」

「知らない」

「すいませーん！ 味噌カツバーガー二つ！ セットで！ ドリン

クはコーラ！」

川崎さんは勝手に注文を決めてしまいました。

毒島さんはずっと黙っていました。川崎さんは一人でどんどん喋り続けます。

「みんなひどいよね。私の言うこと少しも聞いてくれないんだもん！ 毒島さんは私の病気を治してくれたっていうのにさ！ あんなの変だよ！ 私、ずっと毒島さんを誤解してた。みんなが毒島さんのことを、その、悪く言うもんだから、それを信じてたのよ。でもホントは違ったのね。歪んだ情報が独り歩きしていたのよ！ 私今日、それがわかった」

その情報は何にも歪んじゃないよ。と思っただけど、それでも毒島さんは無言を通しました。

「でもすごいよね。病院でもらった薬はあんなに効かなかったもの。あんなのどこで売ってるの？」

毒島さんは答えたくありませんでした。でも、薬のこととなると、つい口が緩んでしまうようです。よくないな、と思いつつも、毒島さんは答えてしまいました。

「売ってないよ。私が調べたんだもの」

「うそっ！ そんなの出来るの!？」

「頭が悪いと無理だけどね」

川崎さんはこの、毒島さんの弱点を見逃しませんでした。続けさまに薬に関する話題が振られます。どこで習ったの？ 材料はなんなの？ どう言う風にして作るの？

毒島さんは心ならずも、そういう質問に次々と答えてしまいました。まるで、川崎さんが用意した台本に合わせて喋っているみたいに、すらすらと言葉が出てきてしまうのです。

毒島さんは内心焦りました。いけない、私、乗せられてる。

ハンバーガーが運ばれてきたので、毒島さんはマスクを外して仕方なくそれに口をつけました。本当は食べる間もなく喋りたいのに、仕方なくハンバーガーを食べました。生まれて初めて食べるその食

べ物を、毒島さんはおいしいとも不味いとも感じませんでした。

川崎さんも食べました。川崎さんは毒島さんと違って、実においしそうにハンバーガーを食べます。口に出して「うん、おいしー！」
といいながら、とびっきりの笑顔で食べます。

ああ、この子は何をしても魅力的だな。と毒島さんは思いました。
こんなにおいしそうに食べてくれるんなら、誰だつてこの子のために料理を作りたくなるだろうな。きつとこの子は笑っているだけで人からなんでも貰えるだろうな。クラスみんなとあんな風に争つて別れても、きつとみんなの方から仲直りをお願いしてくるんだろうな。みんなから愛されてきつと一生幸せだろうな。いいなあ。
いいなあ。

思いのほか時間は早く過ぎ、太陽はもう傾いていました。二人がサボった学校も、とつくに終わってしまった時間です。

毒島さんは、ずっと川崎さんと喋っていました。

それも喋っていたのは川崎さんではなく、いつの間にか、殆ど毒島さんが喋るのを川崎さんが聞くだけになっていたのです。毒島さんはそれに気付いて戸惑いました。

川崎さんが言いました。

「今日は毒島さんと話せてよかったわ」

毒島さんは急に恥ずかしくなつて俯いてしまいました。

そして、食べるために外していたマスクがそのままだったことを思い出し、慌てて付け直しました。しまった。ずっと素顔で喋っていたなんて。なんて馬鹿な私。馬鹿。

「あおう」

毒島さんが話しかけると、川崎さんにはっこり笑つて話に耳を傾けてくれました。

「その、毒島さんって呼ぶの、やめてくれる？ 嫌いな、その名前」

毒島さんは今まで、自分の名前について人に文句を言ったことなんか一度もありませんでした。川崎さんが初めてです。

「下の名前、なんだっけ？」

「キミコ」

「じゃあキミちゃんね！」

「キミちゃん……」

不思議な響きでした。小学校の頃からずっと、ブス島ブス島と呼ばれてきた毒島さんにとって、その名前はまるで自分以外の誰かのことのようにでした。

「私の名前は悠子だから、ユウちゃんって呼んで！」

「……ゆう……ちゃん」

川崎さんは「ハイ！」と可愛らしく返事をしてくれました。

ひよっとして……

毒島さんは思いました。

ひよっとして、この人、私の友達ってことになるのかしら。

第六話 恐ろしいもの

毒島さんは突然、川崎さんが怖くなりました。

絶対おかしいどうかしてる。私に、この私にあんな風に接してくる人間なんて今までいなかったもの。きっと川崎さんは病気の後遺症で頭が変になってしまったんだ。

学校で川崎さんが話しかけてきても、毒島さんは何も言わず、そくさと逃げてしまいました。他の人には何を言われたって無視するばかりで逃げたりしない毒島さんですが、今の川崎さんだけは特別のようでした。

川崎さんの顔を見るだけでなんだか顔が熱くなって、胸がどきどきします。そして背筋が寒くなって喉が渇くのです。ああ怖い。怖くてしょうがない。

「キミちゃん、今日も一緒に帰ろう」

川崎さんがやってきました。

毒島さんは一緒に帰りたと思いました。思ってしまった。

でも駄目です。川崎さんが近づくとすぐにまたあの症状がやってきます。毒島さんはこの症状を治療する薬が作れないのです。

駄目、行つては駄目。嫌な予感がする。あの子に近づいちゃ駄目だ。

「ひ、ひとりで帰るから」

毒島さんはマスクの位置を正しつつ、素早くそこを離れました。

残された川崎さんに、すぐに他の女の子のグループが声をかけます。

「なにしてんのユウちゃん、帰ろうよー」

「う、うん」

ほおらね！ と毒島さんは思いました。

ほーら！ 川崎さんには他の友達が沢山いるんだもの、私なんかあそこには入って行けるわけないし、川崎さんも私よりあっちの方がいいに決まってるよ。私ともあろう者が一体何考えてたの、決まってるでしょ！ 決まってる！

「キミちゃんも一緒においでよ！」

毒島さんは狼に吠えられたウサギのようにびくつと飛び跳ねました。

バカ何言ってるの川崎さん、そんなこと言ったら他の子たちが怒るでしょ。

「変なの。私達、他の人と帰るよ」

毒島さんの思った通り、何人かの女の子がそのグループを抜けて去っていきました。でも川崎さんを含めて三人、まだそこに残っています。川崎さんはまた毒島さん呼びました。

「キミちゃん！」

な、何で呼ぶの！？ 私が行ってもいいの？ ほら、その横の二人、川崎さんになんとか言ってるやいなよ。お前おかしいぞ！ って。ところが、その二人も別に嫌な顔もせず黙っているのです。毒島さんは針金みたいな前髪の下で目を見開いていました。そのまま何も言わずに突っ立っていると、二人のうちの右側、ノツポのそばかす娘さんが毒島さんを見下ろしてこう言うのです。

「はやく来なよ」

……本当にいいの？ 私、そこに入って行ってもいいの？

「……か、川崎さん」

毒島さんは震える声で呼びかけました。

「むっ、違うでしょ、キミちゃん」

「あ……ユウちゃん」

「よーし」

そう言って、川崎さんは毒島さんのタワシ頭を「ごじごじ」と撫でました。にっこり笑いながら撫でました。他の二人も、ふんまあしゅうがないねって顔で笑っています。

そして、ああ、なんてことでしょう。

毒島さんもつられて笑っていました。

エへへ、エへへへ。

第七話 毒島さん見栄を張る

ノッポのそばかす娘さんの名前は柿野草子さんで、あだ名は柿ピーでした。

もう一人の、顔も体もまるっこいのっぺりした子は橋代夕子さんで、あだ名はヨヨでした。

柿ピーとヨヨとキミちゃんこと毒島さんは、三人そろってユウちゃんこと川崎さんの家にお呼ばれしてしまいました。

「さ、キミちゃんも遠慮せずによがって！」

「は、はいお邪魔しま、す」

毒島さんは心の底から緊張しまくっていました。

川崎さんの部屋に通されると、そこはぬいぐるみとアクセサリーの世界でした。

本棚には沢山の参考書の他に、少女漫画や恋愛小説、料理の本や花言葉の辞典なんかが並んでいます。

なんじゃこりゃホームドラマのセットか何かか。と毒島さんは思いました。

みんなそろって紅茶とケーキをご馳走になりました。毒島さんにとっては聞いたことも無いお店のケーキでしたが、相当有名で高価なものなんだろうなということはその見た目と味からすぐに判断できました。

高価なのは分かるのですが、毒島さんは緊張しすぎて全然美味しさが感じられませんでした。

「毒島さんって、思ったほど変な奴じゃなかったのね」

ヨヨが言いました。

「そうかな、変だよ私なんか……」

「まあ確かにそんなこという奴は変かも」

ヨヨは笑って言ったのですが、毒島さんはひよっとして怒らせてしまったんじゃないかと思つて、ごくつとつばを飲みました。

「キミちゃんはおントはスゴイんだよねー。薬のことならなんでもできちゃうし」

「そ、そんなの、そんなの」

川崎さんに言われると、毒島さんは焦つてロレツが回らなくなりました。

何か気の利いたことを言わなきゃユウちゃんに嫌われちゃう。今にも。ほら今にも。

「えー、何でも？　じゃあ水虫の特効薬作れる？」

意地悪そうにそういったのは柿ピーでした。ちなみに、水虫の特効薬を作れるとノーベル賞がもらえるそうです。

「そ、それは、やったことないから……でもやってみる」

「アハハ、いいよ要らないよー」

柿ピーは笑つて言ったのですが、毒島さんはひよっとして怒らせてしまったんじゃないかと思つて、ごくつとつばを飲みました。

「風邪の薬が自分で作れるだけでも大したもんよね。高校生に出来ることじゃないもん」

「ねーっ」

「そんなの、そんなの」

毒島さんのマスクの下の顔は、もうさつきからずつと真っ赤でした。

「風邪薬以外ではどんなの作れるの？」

「えっ、それは……」

毒島さんは考えました。麻酔剤、殺鼠剤、興奮剤、筋弛緩剤、なんだかるくでもない名前ばかりが浮かびます。な、何かもつといい名前を出さなきゃ。栄養剤？　栄養剤なら……。

「例えばさ」

黙っている毒島さんの代わりに、川崎さんが口を開きました。

「惚れ薬、とか？」

「惚れ薬！」

惚れ薬！？ と毒島さんは思いました。

それは一体何剤のことを言っているの???

「できるの!? 毒島さん！」

「まさか、そんなの出来たら私、一生毒島さんについて行っちゃうよー」

「惚れ薬が出来たら私、塚田君に……」

「きゃーっ！」

呆然とする毒島さんをよそに、女子三名は異常な盛り上がりを見せました。毒島さんはどきどきしました。一生ついていっちゃうよ。一生友達でいてくれるよ。一生だよ。

「できるよ」

みんな黙りました。

「私、惚れ薬作れる」

……沈黙はしばらく続きました。みんな毒島さんに注目していました。

毒島さんのマスクが、汗でじんわり湿りました。

「……本当？」

川崎さんはまっすぐに毒島さんを見つめました。

それは宝石みたいに綺麗な瞳でした。

第八話 危ない薬

惚れ薬。人を好きになる薬。

意中の人に飲ませればその人の心を自分のものにできるといふ魔法の薬品。おとぎ話の登場人物でなくとも、年頃の娘でこれを欲しがらない者がありませんか。

といっても、毒島さん自身はこんなもの全然欲しくなかったし今までなんの興味もありませんでしたが、とにかく彼女は大急ぎで研究を始めました。

いつもの毒島さんならこういうときは学校なんか行くのはやめて研究に専念していたわけですが、最近は学校に行きたくて仕方がないので学校もサボりません。でも授業そっこのけでなにやら分厚い本を読んではかりいるので先生に怒られたりしました。

かつてない集中力が毒島さんに宿っていました。かれこれ3日ほどまともに寝ていませんがぜんぜん眠くなりません。まあ、これはちよつとだけお薬の力に頼っていますけど。

そんな毒島さんの様子を、毒島さんの『お友達』は期待と不安の目で見守っていました。

そして

一週間ほどかけて毒島さんは一瓶の薬液を作り上げました。

薬液の中身は精力剤と強心剤それから濃縮したアルコールです。動物実験の結果が上手く反映されてくれるのなら、この薬は被験者の性的欲求を高めつつアルコールによって判断力を低下させ、強心剤による心拍数の増加を恋愛の高揚感と混同させてくれるはずでした。

ようするに、人が恋をしているときの状態を生理学的に再現しよ

うと毒島さんが苦心の末に作り出した薬品ですが、
「……でも動物実験じゃ人間の恋心までは計れないしな……」
ということにはさすがの毒島さんにも分かっていました。
でももう自分でやれることは全てやりました。あとは結果を待つ
のみです。

「やった！ キミちゃん、すごいっ！」
薬を渡すと、川崎さんは文字通り躍り上がって喜びました。

「ちよつとアルコール臭がするけどさ、味は限りなく無味にしたから、それ一瓶何かに混ぜて食べさせれば一時間前後は効果が続くと思っよ」

「なんかこーいうのってドキドキするね」

川崎さんは瓶の蓋を取ってみました。その瞬間、ちよつとどころではないアルコール臭が部屋中に放たれました。柿ピーもヨヨちゃんも思わず「うわっ」と鼻をつまみます。

「大丈夫かー!? これ」

「……ま、クツキーの隠し味にお酒が入ってることにすれば……」
先行きが不安です。

「もし成功したら、アレ私達にも作ってよね」

「あーっ、私は実験台かあー？」

兎にも角にも毒島さん特性惚れ薬は、無事に川崎さんの手に渡りました。

毒島さんはもうあとは祈るばかりでした。

頑張れ私の惚れ薬。ユウちゃんの役に立て。

第九話 便乗したいひとたち

川崎さんと塚田君が付き合い始めたのは、その数日後のことでした。

毒島さんの惚れ薬は、見事に役目を果たしたのです。

「ありがとーっ！ キミちゃんのおかげだよー」

川崎さんは結果報告と同時に、毒島さんの手を取ってはしゃぎ回ります。毒島さん自身は実はあまりあの惚れ薬の効果に期待していません。この報告を聞いて川崎さんと一緒に飛び上がるほど驚きました。

「薬のせいじゃないよ！ ユウちゃんの実力だよ！」

「んーん、あの薬が無かったら私、告白する勇気なんかなかったもん」

二人は一緒になつて教室の中を踊りまわりました。はしゃぎすぎて誰かの机を蹴っ飛ばしてしまうほどでした。

笑い転げる毒島さんのもとに、柿ピーとヨヨちゃんが早歩きでやってきて言いました。

「キミちゃん、私たち、友達よね？」

「友達だよねーっ」

そして二人並んで手のひらを上に両手を突き出し、何やら物欲しげな目で毒島さんを見つめています。川崎さんが「調子いいぞ！

二人とも！」と両手チョップで二人の手を払いのけました。

「いいよ、ちゃんとみんなの分も作ったから」

毒島さんはそう言って、用意していた薬瓶を二本制服の内ポケットから取り出してそれぞれ二人に渡しました。

「さすが！ 話せるー！」

「愛してるぞ、親友よ」

惚れ薬を受け取った二人は毒島さんを両側から抱きすくめました。背の低い毒島さんはすっかり二人の胸に埋まってしまい、マスクの

下の顔を真っ赤に染めていました。

その日の帰り道、川崎さんは毒島さんに言いました。

「キミちゃんはさ、その惚れ薬、誰かに使ったりしなかったの？」

「え？」

毒島さんは驚いて足を止めました。その質問は毒島さんが今の今まで全く考えたことなかったことでした。

「誰か一人ぐらいいるでしょ？好きな人とか、気になる人とか」

「いないいないそんなの！」

毒島さんは大きく横に首を振りました。

男の子なんか大嫌いでした。今まで家族や店員以外の男の人と会話したこと自体ろくにありません。せいぜい、悪口を言われて報復に利尿剤を盛るぐらいです。

だから毒島さんは、惚れ薬を盛りたい男性というものに全く心当たりがありません。

「じゃ、ウチのクラスで惚れ薬を飲ませるとしたら、強いて言えば誰？」

「えー……」

毒島さんは一生懸命思い出せる限りの男子の顔と名前を思い浮かべました。すると、顔と名前が一致している相手は数えるほどしかないことに気がつきました。少し迷った後で毒島さんはその中の一人を選びました。

「じゃあ、塚田君かな……」

「えーっ、駄目よ、塚田君にはもう私が惚れ薬のませちゃったもの」
怒る川崎さんを、へへ、分かっているってと毒島さんは宥めました。
「もちろん分かっているけど、でもやっぱり塚田君はカッコいいもんな。好きか嫌いかは別にして……あんな奴を連れて歩けたら、みんな私を認めてくれるだろうな、って」

毒島さんの言っていることは本心でした。塚田君は本当にカッコよくて、女子の間ではちょっとした人気株なのです。顔がいいばか

りではなく、運動神経がよくってサッカー部なんかにも所属しながらも、成績の方も悪くないところが人気の原因です。性格も、優しくて面白くて話していて飽きることがないってみんな言っています。でも駄目だなあ。私はブスだから少しもつり合わないもんな。やっぱり、ユウちゃんぐらいの美人でないと塚田君みたいなのとは付き合えないんだなあ。

そう思っただけで毒島さんはため息をつきました。

「ユウちゃんはいいな……可愛くて。美形の彼氏もできてさ」
すると川崎さんはふふつと笑って言いました。

「キミちゃんだってかわいいよ。きつとすぐ素敵な彼氏ができるよ」

ああ、ユウちゃんはきつと私を元気付けようとしてくれているんだな。

そう思いながらも毒島さんは、嬉しくて涙がにじんで来るのを止められませんでした。

第十話 増える便乗したい人達

次の日、毒島さんは自分の目を疑うことになりました。

「毒島さん、おはよう！」

そう言って挨拶してきたのは、川崎さんでも柿ピーやヨヨでもありません。今まで顔を合わせて話したことも無いような、クラスの女子の一人です。しかも、彼女一人だけではありません。一人、また一人と、教室中から女の子たちが毒島さんのもとへと集まり始めました。みんな毒島さんに親しげに声をかけてきます。

毒島さんはあつという間に完全に取り囲まれました。みんながみんな不自然なまでの笑顔で口々に語りかけてきます。昨日までは目すらもろくにあわせなかつたのに。こいつら一体何を考えているんだろうと毒島さんは不安に思いました。

「聞いたわよ、毒島さん、大活躍だったね」

なんのことが分からない毒島さんは、そのまま黙って髪の毛越しに目の前の女の子を見上げていました。するとその子は続けてこう言います。

「惚れ薬よ！」

その言葉で毒島さんは全て理解しました。

きつと、柿ピーとヨヨあたりが喋ったのでしよう。この子たちは皆、惚れ薬目当てで毒島さんに取り入ろうという連中なのです。

なんて勝手な。覚えてるぞお前、えーと、須々木。お前はこの前席替えの時、ブス島と隣同士になるぐらいなら次の席替えまで欠席するとか言ってたじゃないか。プライドは無いのか。隣の川田は教室にはブス島がいて飯が不味くなるからどっか外で弁当食べようとか言ってたな。今さらヘラヘラするなよ。

毒嶋さんは思っているままに、彼女らを罵って追い払おうと思いませんでした。

「あ、あの……惚れ薬はそんなに沢山作ってないし……材料買うに

もお金が必要し……」

ところが、口から出たのはそんな弱気な言葉だけでした。思いつくままに相手を罵ろうと思っても、うまく舌が回らないのです。あれ、変だな、と毒嶋さんは思いました。

「そんなこと言わないでさ、ね、お金なら払うから」「私も私も！」

ふざけんなお前ら、そんな虫のイイ話があつてたまるか。そう叫ぶつもりでした。でも毒嶋さんはあうあうと何か口ごもっただけでした。そうこうする間に、女の子たちは次々に財布から千円札を取り出し、毒嶋さんの胸元に無理矢理押し付けます。

たちまちのうちに、重みを感じられるほどの札束が毒嶋さんの手元に出てしまいました。もう誰がいくらお金を出したのか見当もつきません。

「それじゃ、お金渡したから……絶対作ってきてよね」

一方的に約束を押し付けて、彼女らは去っていきました。事が済んだらもう毒嶋さんには見向きもしません。

今からでも遅くはないよな、と毒嶋さんは思いました。

いつもの私なら、こんな金あいつらの目の前でベランダから撒き散らして、そのまま家に帰ってるところだ。今からでも遅くはないから、そうするべきじゃないのか。

ところが、毒嶋さんにはそれが出来ませんでした。こんな状況になっても以前のようにイライラした不快な感情が湧いてこないのです。今はただ怖いだけでした。いつの間にか、すっかり人に嫌われるのが怖くなってしまっていたのです。一週間前の毒嶋さんは誰に嫌われようと関係ないと思っていたのに。

心のバリアを解いてしまった毒嶋さんは、ミノを剥かれたミノムシ同然でした。

……帰ったら、惚れ薬を作り始めよう。

第十一話 自分勝手な人たち

毒島さんはよく頑張りました。

薬の材料の入手には、結構手間取りました。お金はもらったと言っても、薬局に並んでない薬をそんなに大量に手に入れようっていうんだから、普通の方法じゃ駄目です。薬剤師のお父さんに頼まなくてはいけません。

でも、個人的な実験ならともかく、医者でもないのに勝手に調査した薬を他人に処方してしまつては法律違反なので、お父さんには目的を伏せなくてはいけません。毒島さんは結構お父さんが苦手なので（例えば家族でも男の人は苦手）これはちよつとした冒険でした。やつと材料がそろつて調査に取り掛かるわけですが、なにぶん量が多いので、時間も労力もすぐくかかつてしまいます。毒島さんは学校を休んでまで調査を終えました。

毒島さんは本当によく頑張りました。

出来上がった薬を学校に持っていくと、須々木さんがやってきて言いました。

「ああ、その薬、もう要らないから」

毒島さんは、竹ボウキみたいなの前髪の下で目を丸くしました。

「だからみんなのお金返してよね」

「ななな何いつてんの？ もう材料費に使っちゃったよ」

すると須々木さんはいきなり乱暴に毒島さんを突き飛ばしました。大きな音がして机と椅子がひっくり返り、持ってきた薬瓶が四つほど落ちて壊れました。教室の中が病院の何倍も強いアルコール臭と薬品臭に満たされました。

「カンケーないでしょ！ 私達はまだ商品受け取ってないんだからお金返してよ！」

薬を注文した他の女の子たちも集まつて、くちぐちにそうよそつよと喚きたてました。

「なんで？　なんでよ！？」

「なんでもナニもねーよ！　ニセモン掴ませといてお金騙しとろーなんて、完璧詐欺じゃん！　出るとこ出るぞ、ブス島あー！」

にせもの。と、毒島さんは須々木さんの言葉を復唱しました。

「ユウちゃんと塚田別れちゃったんだぞ！　おめーがニセの惚れ薬なんか作ったせいだ！」

え？　なんだって！？　と、毒島さんは聞き返そうとしましたが、それは出来ませんでした。その前に須々木さんの上靴が毒島さんの低い鼻をさらに蹴りつぶしていたからです。マスクが鼻血で汚れました。

そうか。やつぱり薬は効いてなかったんだな。ユウちゃんは塚田君と別れてしまったんだ。私のせいだ。

他の女の子たちも攻撃に参加し始めました。女の子のすることとは思えないようなサッカーボールキックが雨あられと降り注ぎます。教室にはリンチに参加している女子以外にも数人の女子や男子がいましたが、みんな迷惑そうにしているだけでした。

毒島さんは本当によく頑張りました。でももう駄目でした。しばらくぶりに毒島さんの心に、イライラムカムカした気持ちが帰ってきたのです。

「ぶざけんな！！　知るか！！！」

毒島さんは手近にあった足を、誰のものか確かめもせず思い切り引つ張りました。誰かが滑って倒れました。それから倒れた机と一緒にひっくり返っていた自分の鞆をひつつかみ、中に入った薬瓶を手当たり次第に敵に投げつけました。瓶が割れ、ガラス片と薬品が飛散し、鼻をつく匂いがよりいっそう強くなります。女の子たちが悲鳴を上げて飛び退きました。

「自分で勝手に作らせといて好き勝手言ってんな！　金なんかもうねーよ！」

揮発したアルコールの充満したこの部屋で、足元に出来た水溜りに火をつければ、もうそれで毒島さんの勝利です。でも、毒島さん

はマッチもライターも持っていないませんでした。持っていないくてよかったですと毒島さんは思いました。

そのまま毒島さんは、カラになった鞆だけ持って走って教室から逃げました。一度も振り返らずに、走って走って、家の目の前までずっと走りとおしました。

自然に足がもつれて倒れたことで、毒島さんはようやく止まりました。苦しくて、心臓が痛くて、息が出来ませんでした。それから吐きそうです。脇腹も、刃物で刺されたみたいに痛みました。

毒島さんは何も考えていませんでした。頭の中は真っ白です。真っ白です。真っ白です。

電信柱に捕まり、瀕死の病人みたいに壁に寄りかかって肩を擦りながら歩きました。いつの間にかすぐ目の前に毒島さんの家の門がありました。そして、その門の前に誰かが立っているのが分かりました。川崎さんです。

「ユウちゃん」

毒島さんはヨロヨロと、その人の方へと歩いていきました。泥だらけの血まみれ、どこに引っ掛けたのか制服の袖もビリビリに裂けてしまった、まるでたった今そこでとんでもない犯罪に遭ってきたみたいな状態の毒島さんが呼びかけても、川崎さんは顔を上げませんでした。思いつめたような顔で、アスファルトの地面を睨んでいました。

「ユウちゃん、ごめんね、ごめんね。私の薬のせいだよ。ごめんね。私ユウちゃんが……」

毒島さんはヒイヒイ息を切らしながら、早口で何事か川崎さんに何事か訴えました。川崎さんはずっと地面を見ていました。アスファルトの上を進む蟻の行進を眺めているみたいでした。彼らは自分の何十倍も大きい虫の死骸を担いで喜び勇んで進んでいきます。

その間も毒島さんは必死で何かを川崎さんに言い続けています。それを聞いていたのか聞いていなかったのか、しばらく経ってから

出し抜けに、川崎さんは言いました。

「キミちゃん……」

蟻の行進、もしくは、運ばれている死骸に話しかけるみたいに。

「毒を作って欲しいの」

第十二話 魔法の小瓶

その瓶は、秘密の薬棚の一番奥にありました。鍵のかかった小箱の中で、長い間静かに眠っていました。

その瓶は、勇気の瓶でした。

ずっと昔から毒島さんに勇気を与えてくれた、魔法の詰まった瓶でした。

その瓶の中身こそが、川崎さんの求めた物でした。

ほんの少しの量で、証拠も残さず、「人を殺せる薬」。

どんなにつらい事があった日も、どんなに腹が立った日も、帰ってきてこの薬を見ると、毒島さんは不思議と落ち着いたものでした。例えば誰かに馬鹿にされた日、部屋の中でこっそりと箱の鍵を開けて、中の薬を取り出して見るのです。そうしながら自分を馬鹿にした人のことを思い出します。するとたちまち、どんなことでも些細なことに思えて、簡単に許せてしまえるのです。

ブス？ チビ？ それがどうしたって言うの。私はあんた達をいつでも殺せる。その気になれば誰だって殺せる。証拠も残さずに社会から抹殺できるんだ。ふふふふふ。それが毒島さんの秘密でした。

でも……今まで毒島さんは、本当にこの薬を使ったことは一度もありませんでした。

持っているだけで十分だったのです。本当に使わなくてもこの薬は最高の効果を發揮してくれていたのです。もし本当に使ったら……。

だけど、今、川崎さんが、毒島さんの始めての友達が、この薬の

力を欲しがっているのです。毒を。人を殺せる力を。

川崎さんはこの薬を……、きつと、塚田君に使うつもりなのでしょう。何か酷い別れ方をしたから？ 好きなのに、手に入らないから？ 本当のことは毒島さんには分かりません。

確かなのは、毒島さんは川崎さんに「そんなことやめなよ」と言うつもりはないっていうことでした。フラれたからって気にすることないよ、とか、人を殺すなんてよくないことだよ、なんてことは、毒島さんは毛ほども思っていないのです。

ユウちゃんがそうしたいなら、私は協力するよ。

毒島さんは肌身離さず持っていた交通安全のお守りの中から、小さな銀色の鍵を取り出し、秘密の箱を開けました。そしてその中から、まだ封を切られていない勇気の瓶を取り出しました。

実験をしなくちゃ。

毒島さんは思いました。そうだ、本当にこの薬が効くのかどうか、予め実験しておかなくちゃ。本当に人を殺せるのか。本当に証拠は何も残らないのか。

動物実験では駄目だ。これだけは。

本当の

人間で

実験をしなくちゃ。

第十三話 人体実験

その日、教室はいつもより静かでした。

毒島さんは時間どおりに学校にやってきました。クラスの女の子たちは毒島さんの姿を見ても何も言いません。遠くで集まってひそひそと何か相談しています。ときおり何人ががちりとこちらに視線を送ってくるところを見ると、おそらく、毒島さんのことで何か話し合っているのでしょう。あんな騒ぎを起こした後ですから、きっと何か毒島さんにとってよくない話にちがいありません。でも、毒島さんはそんなことは少しも気にしませんでした。それよりもっと重大な問題があるからです。

川崎さんは、まだ教室には来ていないようでした。それから……塚田君も。

昨日、毒島さんは川崎さんに人を殺せる薬を渡しました。

人一人を殺すのに十分な量を、管理しやすいように水で薄めて小瓶につめて渡しました。受け取った川崎さんは「ありがとう」とわずかに笑みを浮かべて、それから「ごめんね」と小さく付け加えました。

そのさらに前の日には、毒島さんは電車に乗って遠く離れた町に行っていました。そして駅前のハンバーガー屋さんで、一番安い普通のハンバーガーを一つ、お持ち帰りで注文しました。包みを受け取ると、今度はその足で駅へ戻り、公衆トイレの個室に籠りました。そして震える手で包みを開くと、ハンバーガーの上のパンを取り、その裏側に持ってきた毒薬をしみこませました。それからまた元通り蓋をして、開いたことが分からないように慎重に包み紙に戻しました。指が震えるのでとても苦労しました。全てやり遂げる頃にはもうハンバーガーは冷めかけていました。

公衆トイレを出た毒島さんは、毒入りハンバーガーの入った紙袋を抱えて駅近くの公園までやって来ました。おぼつかない足取りでなんとかベンチにたどり着いた頃には全身が汗だくでした。

毒島さんは公園の中をよく観察しました。砂場では5歳位の子供たちが転げまわって遊んでいます。あの子たちはベンチの上にハンバーガーが置いてあるのを見たらよく考えずに食べてしまうかもしれません。公園の裏手の林にはブルーシートのテントが集まっています。ああいう所で生活する人たちは落し物や忘れ物でも食べられるものはありがたく頂いてしまうでしょう。昼間なのにブランコで遊んでいる寂しげなサラリーマンは、お昼ご飯も満足に食べずにお腹を空かせているかもしれません。

毒島さんはだんだん呼吸が苦しくなってきました。世間話をしている奥さんも、隣のベンチで語り合っているカップルも、公園の入り口を通り過ぎていくお爺さんも、みんな毒島さんが紙袋を忘れて帰るのを今か今かと待ち構えているようにさえ感じます。

吐き気がしました。まるで自分で毒を飲んでしまったみたいを意識が遠のいていきます。あと少しで袋を抱えたまま失神するところでした。それでも毒島さんはずっとベンチに座ったまま、脂汗を流して公園の人々を観察していました。どれぐらいそうしていたのか、気がつくのとづくに日が沈んでいました。最終電車の時刻さえ近づいていました。毒島さんは紙袋を大事に抱えたまま立ち上がり、ふらつきながら駅に向かいました。

……結局、毒島さんは人体実験をすることができませんでした。毒の入ったハンバーガーは、家に帰る前に100円のライターを買って、川原でこっそり燃やしてしまいました。夜の闇の中で炎が赤く揺れるのを見てみると、まるで悪夢から覚めたように心が落ち着いていくのを感じました。全てが完全に灰になってから、燃えカスを川に流しました。これならもし毒素が燃え残っていてもその毒性は限りなくゼロになるまで薄まるはずです。川は汚れてしまいませんが。

毒島さんの家には、まだ毒薬の瓶がありました。川崎さんに渡しても、まだ半分以上中身が残っています。でも、それはもう魔法の小瓶ではありませんでした。毒なんかあっても自分には使えない事を知ってしまった毒島さんは、永遠に魔法の薬を失ってしまったのです。

私にはあの薬は使えなかったけれど、ユウちゃんは使えるのかな。もし使えるのなら、それはきつとユウちゃんに人を殺すだけの理由があるってことだよ。そう思いながらも毒島さんは、心臓が割れそうに痛むのを止められませんでした。今日、もし塚田君が学校に来なかつたら……。

教室の扉が開くたびに、肺が締め付けられる思いをしながら確認します。また、塚田君ではありませんでした。川崎さんも来ません。もうすぐ朝礼が始まってしまいます。

時計の針は無慈悲に進み、とうとうチャイムが鳴りました。その音は毒島さんの耳に酷い耳鳴りになっていつまでも響きました。

……その音に紛れてガラスと扉が開きました。

「あぶねー、ギリギリセーフ」

そして、塚田君が元氣そうに教室に駆け込んできたのです。

毒島さんは思わず立ち上がっていました。それも、椅子が倒れるぐらい勢いよく。その音でみんなの視線が一瞬だけ毒島さんを集まりましたが、音源が毒島さんだとわかるとみんな何も言いませんでした。

毒島さんは、ほっと胸を撫で下ろしていました。よかった。とにかく今日は何もなかったんだ。ユウちゃんは来てないけど、塚田君はまだ生きていた。

塚田君に続いて、先生が教室に入ってきました。見慣れない顔だと思つたら、それは学年主任の太田先生でした。太田先生は手際よく生徒たちを席につかせると、教卓に立ってこう言いました。

「皆さんに、残念なお知らせをしなければなりません」

急に教室の温度が下がり、何もかもが凍りついたように感じました。教室中の人間が沈黙し、時間までも凍りついたかのようにです。

それは、本当は1秒よりも短い間のことでしたが、毒島さんにとつては永遠に近い沈黙でした。もう少しで凍った時間が端からほつれて無限の闇に落ちるんじゃないかと思いはじめた頃、やっと太田先生は口を開きました。

「このクラスの担任武田先生が、昨晚亡くなられました」

第十四話 ヒトコロシ

武田先生の死因はアレルギー性のショック症状による心臓停止。アレルギーの原因となった物質は今のところ不明。

あの薬だ。毒島さんにはすぐにわかりました。あの薬は強烈なアレルギー反応を引き起こして人を殺すのです。その薬を武田先生に飲ませたのは川崎さん以外に考えられません。

武田先生は生徒たちからも好かれるよい先生でした。女子生徒にも人気がありました。年も若くて、比較的生徒たちと考え方が似ていたからからでしょう。

でも毒島さんはこの先生が嫌いでした。先生は大多数の生徒と仲良くする一方で、毒島さんのようなはみ出しものの生徒には極力関わらないようにしていたからです。せつかく全体が上手くいっているのだから、一部の生徒のために余計な問題を引き起こしたくないという考え方がありありと見えてくるようで不快でした。

それでも……毒島さんはあの先生を殺そうと思ったことはありませんでした。ましてや他の生徒たちと一緒に先生と仲良くしていた川崎さんが、なぜ毒を盛ったりしなればならなかったのか、毒島さんにはわかりません。てっきり塚田君を殺すつもりなんだと思っていたのに。

きっと、殺すのに十分な理由があったのだ。と、毒島さんは思うことにしました。

そうだ。私は身をもって体験した。人を殺すことは簡単なことじゃない。例え「殺害」自体が至極簡単な作業になったとしても、人間一人を殺すと言う事実の重みは無くせない。

今の時代、日本中で数えきれないほど殺人事件は起きている。テレビのニュースを見ていると本当に軽々しい気持ちで誰かが誰かを殺しているように思える。でもそれは違う。本当はみんなそれぞれ

の深い重い理由があつて「殺人」という結果に行き着くのだ。そうでなければ日常と殺人の間の高い高い壁は越えられない。ただ、誰もその理由を教えてくれないだけ。みんな「本当の理由」を心の奥に隠して（あるいは見つけれずには？）、私達には腹が立ったからとか、死ぬと思わなかつたとか、間に合わせの動機を告げているに過ぎないんだろう。

ユウちゃんにはユウちゃんの、「本当の理由」がどこかにあるんだ。ただそれを私には教えてくれなかつたけど。

学校の中で、警察関係の人たちを時々見かけるようになりました。家まで警察が事情を聞きに来たという話も聞くようになりました。

毒島さんは、ただひたすら祈りました。このまま事件の証拠が見つからず、武田先生の変死が単なる事故か病死で終わることを。

教室の様子も以前とは変わりました。新しい担任には学年主任の太田先生がつかいましたが、今のところ生徒達との関係はなんだかギクシャクしています。友達同士で笑いあう声も殆ど聞かれなくなりました。代わりに聞こえるのは、ヒソヒソとした噂話。

先生はどうして死んだのかしら。病氣だったのかしら。そうではないのかしら。武田先生には、命に関わるような病氣や疾患の気配なんて一切無かつたそうじゃないの。きっと病氣じゃないわ。誰かが殺したのよ。

それは誰かつて……？

女子を代表して須々木さんが、川田さんをお供に連れて毒島さんの席へやって来ました。

「お前さ……」

須々木さんは毒島さんを冷たい目で見つめていました。「お前さ」に続く言葉はなかなか見つからないようでした。今回ばかりは須々木さんも、いつものように高圧的な態度ではありません。その目に

は冷たさと同時に、恐れも伺えます。

毒島さんは出来るだけ平静を保とうとしました。しかしなんとか表情は保てても、次々と額を伝う脂汗までは止められません。沈黙は長く続きました。

「何か……言うことないか……？」

毒島さんは、その言葉を無視しました。というより返す言葉が見つからなかったのです。喉もなんだかヒクついているし、まともに声を出せそうにありません。

クラス中がひっそりと静まりながら、そのやり取りを見守っているのが気配でわかりました。

「知ってるんだぞ……みんな」

これはきつとハツタリです。須々木さんは何も知るわけが無いんですから。毒島さんは下唇を噛みました。血管が狂ったように脈打つのを歯に感じました。

「ユウちゃんが前に言ってたんだ。お前が、毒を持ってるって」
肺がヒュツと音を立てました。目に涙が溜まっています。

きつとこれもハツタリだ。反応しちゃだめだ。

「黙ってないで何か言えよ。嘘じゃないぞ。ユウちゃんはお前が毒入りの瓶を見せびらかしてきて、すごく怖かったって言ってたんだ。言つとくけど作り話だなんて言いわけは通用しないからな。ユウちゃんは先生が死ぬ前にその話をしていたんだ。事件が起きる前にそんな作り話できるわけないだろ。なあ」

……そんなの。うそだ。

「ユウちゃんがなんで学校に来ないと思ってるんだ。お前が怖いからだよ！ 人殺し！ 何とか言え！！」

噛んでいた唇から血が伝いました。それから喉がビリビリ震ええました。それが自分の叫び声の振動だと気付くのに時間がかかりました。

悲鳴の後にはしばらくの静寂がありました。はっとしてみると毒島さんの目の前で、須々木さんと川田さんが床に尻もちをついてい

ました。須々木さんの顔が恐怖に引きつっています。川田さんは顔を真っ赤にして涙を流しています。

途端に、毒島さんは実感を持って理解しました。須々木さんは嘘をついていない、と。

彼女たちは毒島さんを陥れようとしているわけではないのです。本当に毒島さんに恐怖しているのです。川崎さんの言ったことを信じているから。

誰一人何も言わないのに、クラス中から恐怖が伝わってきました。みんな毒島さんが怖いのです。みんなの目には不気味な殺人鬼が映っているのです。

毒島さんは鞆を持って、黙って教室を出ました。最後まで誰も口を開きませんでした。

どうしよう。これからどうなる？

あの子たちが警察に通報したら、すぐにでも私の家に捜査の手が入るだろう。家には先生を殺した毒がまだある。見つかったら言い逃れはできない。捨ててしまおうか？

でも、私が捕まればユウちゃんは捕まらずにすむ。だったらそれでもいいかな。

……本当にいいの？ だってユウちゃんは、私に罪をなすりつけたよ。予めみんなに噂を流しておいて、私に疑いの目がかかるように仕向けていたんだよ。友達なのに。

……いや、友達だと思っていたのに。

第十五話 捨てといて

毒島さんは、家に帰る気にはなれませんでした。足が動くのに任せて町の中をふらふらと歩いていると、いつの間にか駅近くのハンバーガー屋さんの前にまで来ていました。

以前、川崎さんと二人で入ったハンバーガー屋さんです。川崎さんと友達になった場所、生まれて始めて友達というものを知った場所です。

誘われるように毒島さんは店の中に入りました。なんとなく窓際の席に座り、窓の外の景色を眺めました。もう冬でした。

店員さんがやってきて、そういえば注文をしなければいけないだなと気がつきました。味噌カツバーガーを注文すると、それは期間限定メニューだったのでもうありませんと言われたので、仕方なくので普通のハンバーガーを単品で注文しました。

注文したハンバーガーは、驚くほど早く届きました。注文を取りに来た店員さんが去るのをポーッと眺めていると、いつの間にか目の前にあつたのです。毒島さんはそれを食べようと思いましたが、ところが、手を伸ばそうとする毒島さんの目の前で、別の手によってハンバーガーが奪い去られてしまいました。

「あ……なにをするの」

ハンバーガーを取ったのは、どうやら塚田君のようでした。いつの間、そして何故、彼が自分の目の前の席に座っていたのか、毒島さんには全く分かりません。

「……何してんの？」

訝しがる毒島さんの目の前で、塚田君は包みを開いてハンバーガーに噛りつきました。

「もう冷めきつてんな、これ」

「ちよ……私の」

塚田君は毒島さんなどまるで存在しないかのように、ハンバーガ

「一個を瞬く間に食べきってしまいました。適当にそして包み紙を丸めながら言います。」

「代わりの奢ってやるよ。何でもいいぞ」

「別に要らない」

「すいませーん、焼肉バーガーセット二つ！」

ろくに話も聞かず、塚田君は勝手に注文してしまいました。このシチュエーションは毒島さんに何かを思い出させるようです。

ふと気がついて、毒島さんは窓の外を見ました。お昼ごろだと思っていたのに、いつの間にかもう夕方でした。塚田君がさつき食べたハンバーガーは、冷め切っていたところかそろそろ乾燥し始めていたことでしょう。何時間も椅子に座ってボーっとしていたのでは、ハンバーガーを取られてもしょうがないなと毒島さんは思いました。

焼肉バーガーセットが二セット運ばれてきました。塚田君は毒島さんのハンバーガーを食べたのに、まだ食べるつもりのようにです。どう言うつもりかは分かりませんが、毒島さんはとにかくこの場を離れたい気持ちでいっぱいでした。男の子と話すのは苦手です。

「マズイことになったな」

毒島さんの気持ちを知ってか知らずか、塚田君は落ち着いた様子で話し始めました。

「もうクラス中の奴らがお前がやったと思っ込んでるぞ。今回の事件」

「え……」

毒島さんは思わず顔を上げました。塚田君はなんてことない顔をして焼肉バーガーをもぐもぐしています。

「……私が出たと思っ込んでる」？　今この人はそう言ったのかしら。

「あなたは思っ込んでないの？」

「ああ。俺は今回の事件、川崎悠子の仕業だと思ってる。証拠はないが」

「ごくん。と毒島さんは唾を飲み込みました。

「お前、何か知ってることがあったら言ってくれよ」

「……どうしよう。この人は、ひょっとしたら私の味方になってくれるかもしれない。」

毒島さんは迷いました。塚田君が自分にとって有利な証言をしてくれたら、毒島さんにかかった疑いは晴れるかもしれません。でもそうしたら、川崎さんはどうなってしまおうのでしょうか。友達だと思っていた川崎さんは。

「私は何も知らないよ」

毒島さんは、思わずそう口にしていました。ポテトをつまむ塚田君の手が止まります。

「本当か？」

「本当」

毒島さんは声の震えをごまかすために、急いで焼肉バーガーを口に詰め込みました。小食な毒島さんにはこのハンバーガーのボリューム感は結構こたえます。

「俺と川崎悠子がしばらく付き合っていたのは、お前知ってるだろう」

「……シラナイ」

「嘘つけ。本人がお前のお陰で付き合えるって言ってたんだぞ」

「……し……知ってた」

毒島さんは動揺して、むせてしまいました。それが落ち着くのを待ってから、塚田君は続きを話します。

「いいか？ あいつに告白された時、俺ははつきりした返事はしなかったんだ。そしたらアイツはこう言った。じゃあ今度一日デートして、それで付き合えそうかどうか決めてくれ、と。俺は納得して、試しに一日だけアイツと付き合うことにした」

毒島さんはなんだかちよっと赤くなりました。それを悟られないようにマスクの位置を直そうとして、食事中なのでつけていなかったことに気付きました。恥ずかしさが二倍ぐらいになりました。

「付き合っただのはその一日だけだったが、アイツの様子はおかしかった。少なくとも告白した相手と始めてデートするというような浮かれた感じじゃなかった。どちらかと言うと上の空で、うわべだけで楽しんでいるフリをしていたな。俺ははつきり言っただけが立ったね。自分で付き合ってくれと言っという一体なんなんだと思った。しかし、それで次の日学校に来てみると、いつの間にか俺と川崎悠子はもう付き合っていることになってた。アイツが噂を流していたんだ」

「え？ そんな……」

「そこで俺はアイツにハッキリ言っただろうと思った。お前と付き合う気はないから、勝手に変な噂を流すな、と。だが俺がそれを言う前に、アイツの方が俺を呼び出して、この前の話は無かったことにしてくれ、なんて言っただけだったんだ。ろくに俺の意見も聞かず、何から何まで一方的にだ。しかもな！ それも何故か俺がフツたことにされてたんだぞ！ 一晩寝ただけで用済みになって酷い振り方をされたとかアイツが言いふらしたんだ。何だその目は！ 寝てねーよ……！」

塚田君があまりに興奮して大声で話すので、毒島さんは身の縮まる思いがしました。これだから男の子は苦手です。怯えている毒島さんに気付いて塚田君は「あ、ごめん」と申し訳なさそうにしました。

しかし、今の話は毒島さんの知っている話と随分違いました。毒島さんは二人が付き合い始めてすぐに酷い別れ方をして、川崎さんが傷ついているんだと思っていたのに。それに、今の話ではどこにも毒島さんの作った惚れ薬が出てきません。

「塚田君は、ユウちゃんに何か食べ物とかもらわなかった？」

「は？」

「あ、いや……」

川崎さんはせっかく毒島さんが作った惚れ薬を使いもしなかったのでしょうか。それじゃあ一体、どうして塚田君に告白して、そし

て自分からすぐに別れなくてはならなかったのでしょうか。

塚田君が言いました。

「いいか？ つまりだ、アイツは俺と付き合って、それから別れて傷つけられたという設定が欲しかっただけなんだ。どういうことかというのだな、ここからは俺の予想の話になるんだが……」

塚田君は一度落ち着いて口の中のものをジュースで流し込み、話し始めます。

「川崎悠子が、なぜこんな噂を流さなければならなかったのか。それはつまり、毒島、お前を騙すためだと思う。川崎はまずお前に近づき、そして俺に告白するに当たっての相談やら手助けやらをお前に求めた。詳しい事情は俺は知らないがそうなんだろう？ そうすることでお前に、『俺と川崎の仲に一枚噛んだという責任』を植えつけたかった。そして俺たちは破局し、川崎の狙い通り、二人の仲を取り持ったお前はひどく責任を感じたはずだ。そして自分のせいで傷ついた友達という立場を利用して、川崎はお前に何か頼みごとをした」

「……」

毒島さんは黙ってそれを聞いていました。

「なあ、毒島。川崎は何かお前に要求しただろ？ 違うか？」

毒島さんは黙っていました。

「頼むよ。俺はお前に対して怒らないし、誰かに告げ口もしない。俺はただ川崎悠子が許せないだけだ。な、お前が川崎に頼まれて、武田先生を殺した『毒』を用意したんだろ？ ……多分、最初は俺を殺すためという名目で頼まれたんだろうけど、お前を責めたりはしない。俺たちは二人とも、川崎に利用されたんだ。最初から川崎は毒を手に入れるため、『武田先生を殺すために』お前に取り入ったり、俺を女を使い捨てにする下衆野郎に仕立て上げたりしたんだからな。俺はあの先生が嫌いじゃなかった。だから川崎悠子を許すことはできない。お前だつてこのままじゃ先生殺しの犯人に仕立て上げられてしまうのに、黙ってられるのか？ なあ頼むよ。一緒に

警察に行ってくれ。俺一人の証言じゃ弱いんだよ」
毒島さんは……。

毒島さんは黙って焼肉バーガーを食べ始めました。塚田君と比べて毒島さんの食べる速度はずいぶんゆっくりでした。ポリウム満点のハンバーガーとポテトとジュースのセットを毒島さんが少しずつ少しずつ食べるのを塚田君も黙ってじっと見守りました。

毒島さんは考えていました。今から少し昔のことを。

私は、顔が可愛い人は何をやっても上手くいくのだと思っていた。自分は何もなくても回りの人が世話を焼いてくれるし、黙っていてもちやほやしてくれるし、ただ立っているだけでどんどん友達が集まってきて、どんどん幸せになっていくんだと思っていた。

それに比べて自分は不細工だから、何をやっても上手くいかないし、友達も出来ないし、疎まれて、蔑まれて、一生を不幸に過ごさなければならぬんだと、そう思っていた。

でも、それは違ったんだ。

あんなに可愛くて、魅力的で、頭もいい川崎さんでも、必ず幸せになれるとは限らなかった。友達に嘘をついて、クラス中のみんなを騙して、恋人になれたかも知れない人を裏切っても、誰かを殺したいほど憎まなければならぬなんて、そんなの幸せじゃない。

塚田君だってそう。カツコよくて、女子みんなから好かれているのに、ある日突然酷いプレイボーイの疑いを着せられて、一度付き合った人を警察に突き出そうとしてるんだ。きっと辛い気持ちだ。

私は不細工かもしれないけれど……。誰も、私を可愛いとは言ってくれないけれど……。でも、ちゃんと友達ができた。短い間だったけれど、とても幸せな気持ちになれた。

顔は関係なかったんだ。私はずっと、醜さや背の低さのせいにして、自分の生まれつきのせいにして、幸せから逃げていたんだ。

私はきつと、ユウちゃんのおかげで救われた。ユウちゃんにとっ

て私は、毒を手に入れるための道具に過ぎなかったのかもしれないけれど、それでもいい。あの子はやっぱり私の友達だ。今度は私があの子を救ってあげる番なんだ。

「決めた。私、ユウちゃんに会いに行ってみる」

毒島さんは言いました。

塚田君は深刻そうな顔をして、毒島さんの顔を見つめました。

「止めたほうがいいぞ。アイツの言うことは全部嘘ばかりだ。また騙されることになる」

毒島さんは塚田君に微笑みかけました。彼女のこんな表情を見たのはおそらく塚田君が初めてでしょう。あまりにも意外だったので塚田君は思わず言葉を失ってしまいました。

「あんまりユウちゃんを悪く言わないで、塚田君。大切な友達なんだ。ユウちゃんのこと、許せないかもしれないけど、私はやっぱりまだ信じてあげたいよ。きっと何か理由があるんだ。会って話を聞かなくちゃいけないと思う」

それはとても清々しい表情でした。悩みなんかまるでなさそうな、屈託の無いほほえみです。うそ臭さのない笑顔です。

「お前、そういうコト言う奴だったんだ。知らなかった」

塚田君はこの時始めて、自分が今まで毒島君子の顔を少しも見ていなかったことに気付きました。マスクを外した毒島さんは、塚田君が思っていたほど醜くも不気味でもありませんでした。

「この代金、塚田君持ちだよな」

「あ？ ああ、うん」

「悪いね。ご馳走様。私早速ユウちゃんの家に行ってみる。こうやって決心がついたのも塚田君のおかげだよ。ありがとう」

毒島さんは鞆を担ぐのももどかしそうに、急いで席を立ちました。そのまま走り去ろうとした背中を塚田君が呼び止めます。

「おいっ、忘れ物だぞ！」

その手には白いマスクが掲げられていました。

今までずっと毒島さんの素顔を隠してきたマスクです。

「要らない！ 捨てて！」

毒島さんはろくに振り返りもせず、風のように去って行きました。

塚田君は残されたマスクを掴んだまま、呆気に取られるばかりでした。

第十六話 空気の重い部屋

マスクを着けていない毒島さんはなんだか落ち着きませんでした。新鮮な空気が顔に触れます。もう人々の視線から身を守るものはありません。でも、もうマスクは塚田君にあげてしまったので、今さら後戻りはできません。

ちよつと早まったか。と毒島さんは思いました。

弱気になっている場合ではありません。毒島さんは今、川崎さんの家の前に立っているのです。目の前にインターホンがあります。これを押すためにはもつと強い心が必要です。

ユウちゃん、本当に先生を殺してしまったの？ 私と友達になったのは先生を殺すためだったの？ 今までのユウちゃんは嘘だったの？

私が言いたいことはたくさんあるけど、それはひとまず封印だ。ユウちゃんの話の聞きに行くぞ。

毒島さんはぱちんと自分の顔面をはたいて気合を入れました。人差し指がインターホンに伸びます。

川崎さんのお母さんは、悠子は誰にも会いたくないと言っている、と言いましたが、毒島さんがどうしても話をしたいと言つと、了承して通してくれました。そして、私にもなぜあの子が部屋に閉じこもっているのかわからない。どうか元氣付けてあげて欲しい、と言いました。

お母さんに連れられて川崎さんの部屋へ行きます。毒島さんは深呼吸をして、部屋のドアを開けました。

川崎悠子さんは、ベッドの中で布団にくるまっていました。

まるで病気のようです。毒島さんは、初めてこの部屋に来たときのことを思い出しました。思えばあの時、病気の川崎さんに薬を渡そうと考えなければ、今頃どうなっていたのでしょうか。

「お母さん……？ 悪いけど今は……」

川崎さんは呆けたような声で何かを呟きながら起き上がりました。そして毒島さんの姿を見ると、そのままの姿勢で硬直してしまいました。まるで呼吸をするのも忘れてしまったようです。

「あの……二人で話させてください」

毒島さんは川崎さんのお母さんに言いました。お母さんは納得して、黙ってその場を離れ、奥の居間の方へ行ってくれました。

「いよいよ、毒島さんは川崎さんと二人きりになりました。」

「ユウちゃん、あの……」

「いざ話そうとすると全く言葉が出てきません。」

「しばらく学校に来てないから、どうしたかと思って」

変な作り笑いを浮かべながら、毒島さんは言いました。

今の言葉は初めに話そうと思っていた内容とは随分かけ離れているような気がしました。

「毒島さん、私今あなたと会いたくないわ」

川崎さんは壁のほうを見ながら、冷たい口調で返事をしました。

まるつきり、毒島さんと友達だったのは誰か別人で、ここにいるのはそうなる以前のろくに話したこともなかった頃の川崎さんであるように感じられます。

毒島さんは今になって、初めて寂しさというものを自覚しました。それは錆びた釘を心臓に打ち込まれるような、冷えて尖った感触でした。

「ユウちゃん。こんなことになっちゃったけど、私まだキミのこと信じてるの。だから少しだけ、話を聞かせて」

泣きそうになるのをこらえながら言うと、少し声が震えました。

川崎さんは黙っています。黙って部屋の壁を睨んでいます。そこから目を離すと恐ろしい生き物にとって喰われると思っ込んでいる

かのようなです。

「話すことは何もないから、早く帰って」

その声は毒島さんと比べると全く平静そのものでした。

そして、沈黙がしばらくその場を支配します。

毒島さんは次の言葉を考えていました。どうしよう。どう言ったらユウちゃんの心に届くのだろう。私は話すのが苦手だ。どうしても上手い言い方が見つからない。ユウちゃんは何も言ってくれない。目の前にいるのに、こんなに遠い。ああああ。

毒島さんはその場にしゃがみこんで、しばらくシクシク泣きました。泣くときひざを抱えて声を押し殺すのは、小さい頃からの癖です。

川崎さんはずっとずっと黙っていました。ベッドの中で起き上がった体制のまま、まだ壁と見つめ合っています。この部屋だけ時間が切り取られてしまったようです。それはまるで小さい頃に見た悪夢みたいな光景でした。

何十分か経って、涙も枯れた頃に、毒島さんはゆっくりと立ち上がりました。そして涙の跡がくつきり残った顔で、弱々しい笑みを浮かべます。

「また、学校で会おうね」

それはとても虚しい言葉でした。もちろん返事はありません。

まだ時間を切り取られたままの川崎さんを背に、毒島さんは部屋を出ました。

扉を閉めるがちやりという音が、いやに大きく響きました。

第十七話 遅れた返事

見上げると、空は赤紫色をしていました。

西のほうにわずかに残った夕焼け空を、東側から黒い闇がじわじわと食い潰していきます。夜はもうすぐです。

毒島さんは歩きながら泣いていました。喉がカラカラになっているのに、涙はあとからあとから止まりません。

ずっと一人で生きてきた毒島さんは、今まで寂しいという気持ちを知りませんでした。生まれて初めて味わう孤独は、毒島さんが想像していたよりもずっと切なくて、でも同時にどこか甘美でもありました。

目を閉じると、川崎さんと笑いあった時間がまぶたの裏を飛び去ります。わずかの間のことだったのに、毒島さんの高校生活を全部あわせたよりも重みのある記憶でした。

ふと、毒島さんは違和感を感じました。通りの先が妙に騒がしいのです。そこは丁度毒島さんの家のあるあたりです。胸騒ぎがしました。涙を拭いて顔を上げると、毒島さんは早足で通りを抜けました。

ああ、悪い予感当たってしまいました。毒島さんの家の前には、不吉な白と黒に塗り分けられたパトカーが一台停まっています。騒がしさの原因はそれを取り巻く野次馬たちでした。

玄関の前に毒島さんのお母さんが立っています。警察の人と話をしているようです。少し距離は離れていましたが、お母さんが顔を上げたときに目が合いました。

……お母さんは泣いていました。それで話の内容は大体察しがつかれました。

毒島さんは、全身から血の気がさあつと引いていくのを感じまし

た。そのまま走って逃げ出したい衝動に駆られました。でも、もうその時にはお母さんの視線の動きに気付いた警察官が、制帽の下の鋭い目で毒島さんを捉えていたのです。

毒島さんは、その場に立ち竦んで待つほかありませんでした。

しーんと静まり返った部屋に、突然場違いなほど陽気なメロディ
ーが流れました。

携帯電話の着信音です。呑気な曲調と裏腹に、バイブレーション機能が急かすようにガリガリと机を打って激しい音を立てました。ベッドの上の布団の塊の中から、にゅーと白い腕が伸びました。川崎さんの腕です。布団にくるまったまま手探りで机の上をしばらくまさぐっていましたが、指をぶつけて携帯を床に落としてしまったので、諦めてのそのそと顔を出しました。

……酷い顔でした。涙の跡でまぶたと鼻の頭が真っ赤になっていました。肌が白いのでそれが余計に目立ちます。ずっと布団にくるまっていたので頭の方もボサボサです。

川崎さんはその顔のまま、一つ咳払いをして声の確認をしつつ、携帯の通話ボタンを押しました。

「……はい」

自然な声が出せました。

「よう」

電話の相手は塚田君のようです。川崎さんはディスプレイをよく見もせずに電話を取ったことを後悔しつつ、ぶっきらぼうに感じました。

「何か用かしら」

「おいおい、なんなんだその態度は。一度は付き合った仲じゃないか」

「今忙しいから、切るわよ」

「フン、切る前に一つだけ聞け。聞かないと後悔するぞ」

「……何？」

「今日、毒島が逮捕されたんだが、知ってるか？」

「……」

「おめでとう。これで何もかもお前の思い通りになったと言っただけだ」

「そんなのが言いたかったわけ？」

「いいや、警告がしたかったのさ。お前はクラス中を味方につけるつもりかもしれないが、実際は女子だけだ。男子のほうはお前を信じきってる奴ばかりじゃないから、気をつけたほうがいいぞ？」

「……じゃあ、切るわよ」

「あーあーあー、悪いな、もう一つ思い出した」

「……」

「俺はついこの間お前に告白されたわけだが、そう言えば一度もお前に返事をしていなかった。せつかくだから今、返事を聞かせてやるわ」

「別に、もうどうだっていいわよ」

「いいか？ 俺はお前の相手なんか死んでもゴメンだ。お前より毒島の方が百倍以上いい」

「……」

「毒島は今でもお前を」

川崎さんは通話を切りました。

……そして、静かになった通話口に向かって呟きました。

「自分でも、そう思うわ」

第十八話 三枝美穂の行方

そこはよく整理された、けれども狭く薄暗い部屋でした。夜の闇が窓枠の中を黒一色に染めています。

毒島さんは一人の刑事さんと机を挟んで向かい合って座っていました。傍らには記録係が広げたノートを前に押し黙っています。

警察署の取調室。その光景はまるでドラマのワンシーンのようで現実味が感じられません。

「それでは、事件についてあなたが知っていることを話してください」

刑事さんがまるで学校の先生みたいな口調で言いました。

毒島さんは応えません。うつむいて小さく震えています。意図して黙秘していると言うよりは、言葉を話せるほど頭が回っていないと言う様子です。

これから私はどうなるんだろう。ええとええと、この前に見たドラマではどうだった？

そうだ、何の変哲もない幸せな主婦だったのに、ある日突然悪質な飲酒運転の車に轢き逃げされて夫と息子を失い不幸のどん底に沈んだ三枝美穂は、三年後に恋人として出会った男が実はその犯人だったことを知り、思いつめた拳句に殺してしまうんだ。その後被害者のもと恋人だった女性に罪をなすりつけることを思いつくんだ。ど……ええと……色々あって……、結局彼女は捕まってしまう。苦勞して考えたアリバイ工作も凶器の隠し方も全て見破られてしまう。そして、刑事さんに自分があの男のせいでどんなに辛い思いをしたか、その男と恋をしていた事実がどれほど自分を苦しめたかなんてことを力説するけれど、『けれども殺してしまっ』なんて諭されて、結局手錠をかけられて、パトカーに乗せられて……。

あれっ！？　そこでスタッフロールが流れてくる！　そこからが重要なのに終わりだなんてあんまりだ！　あの後三枝美穂はどうなってしまったんだ！？

彼女の罪は殺人罪。もしあの後死刑や終身刑になっていたら、刑事さんのやったことも人殺しじゃないの？　法律に反してなきや人殺してもいいの！？　それじゃあ今日の前にいる刑事さんに私の生き死にを左右する権利があるってこと？　そんなのないよ……そんなの……おかしい。

毒島さんがいくら質問しても少しも反応しないので、刑事さんも少し困ってしまいました。そこで、隣の記録係さんと小声で一言一言相談して、なにやら小さく頷きあいます。

「キミの部屋から、これが出てきたんだが」
そう言っただけで刑事さんが取り出したのは、先生を殺した毒薬の瓶でした。

毒島さんは驚きました。一瞬で背骨が折れそうな勢いで伸びました。

この人たち、私の部屋を調べたんだ！　秘密の薬棚は下着入れの奥にあるのになんてことを、いやそれどころじゃないぞ。どうしようどうしよう。そうだあの薬は毒劇法には指定されてないから持つだけじゃ犯罪にはならないんだいやそういう問題でもない。このままじゃ私本当にええとどうしようどうしようどうしよう。

「あつ、あの、あ、あつ」

毒島さんの舌が言葉にならない言葉を発しました。刑事さんたちは冷たい目で毒島さんを見ています。とても冷たい目です。毒島さんを殺人犯だと思っ込んでいるクラスメイトたちと同じ目。

ガチャ、と音がして、取調室の扉が開きました。そして入ってきたのは、五十歳前後の女性職員さんです。失礼します、と一言断つてから、刑事さんのそばに歩み寄り、そっと何か耳打ちしました。

記録係さんも加わって、何か三人でこそそこそと相談しあっています。なんだろう、と毒島さんは思いました。女性職員さんは何かを知らせて来たのです。それは果たして毒島さんにとっていい知らせなのでしょうか、悪い知らせなのでしょうか。

しばらくして、刑事さんは言いました。

「……これから君の友達がここに来るそうだ。そしてその子は、自分が武田先生を殺した、と言っているらしい」

「えっ？」

毒島さんは自分の耳を疑いました。扉に目をやると、覗き窓越しに外で待機している人影が二つ見えました。一人は大人の男の人らしき影ですから、おそらく女性職員さんと一緒にもう一人を連れてきた刑事さん、そして、そのもう一人の影は……。

第十八話 三枝美穂の行方（後書き）

毎度「毒島さんと呼ばないで」をご覧頂いております皆様、ありがとうございます。

なんと毒島さんは次回で堂々完結です。ここまでお付き合いくださって本当にありがとうございます。

最終回だけあってとっても長くなりますが、最後までお楽しみいただけましたら幸いです。

次回作プロットも同時進行中。近いうちに公開できると思うのでそちらもお楽しみにね。

第十九話 仲良くお迎え

扉が開いて、あの子がゆっくりと入ってきました。

いつもより少し濃い目にお化粧をして……まるで、『私、これから彼氏とちよつと買い物に行くのよ』と言うようないでたちです。しかし、そのお化粧が実は涙の跡を隠すための苦肉の策だということまでは毒島さんにはわかりません。

「ユウちゃん！」

毒島さんは思わず叫びました。

川崎さんは扉から顔だけこちらに覗かせて、まるで喧嘩していた友達と仲直りしたがっているみたいに、はにかんだ笑みを見せながらちらちらとこちらに手を振りました。

「な、なんで……」

「自首しにきたのよ」

川崎さんは付き添いの人と一緒に部屋の中に入ってくると、呆然とする毒島さんを尻目に刑事さんと記録係さんの方に向き直りました。

「私、武田先生に毒を飲ませて殺しました。そこにいる毒島さんは関係ありません。ウチに返してやってください」

それは自首しに来た犯人と言うよりは、むしろ財布を届けに来た子供のような、誇らしげな口調であるように感じられました。その自信に満ちた様子に刑事さんたちが戸惑っているのが見えました。

「うそつき！」

毒島さんは出し抜けに叫びました。

「うそだ！ 刑事さんこの人私をかばおうとしてるの！ あれ本当は私がやったの今まで黙っててごめんなさい」

「ふん、バカ言ってるんじゃないの。あんたみたいなちんちくりんに人を殺せるわけじゃないの」

口に唾する勢いで刑事さんに迫る毒島さんを、川崎さんが軽くあ

しらいます。

「なにをー！ 刑事さん見たでしょ、私毒持ってたのよ！ 本物の毒！ ちゃんと調べてよ先生を殺した毒とおなじだから」

「そんなの私だって持ってるわ」

川崎さんはポケットからひよいと薬瓶を取り出しました。中には透明の液体が入っています。毒島さんが川崎さんにあげた毒の残りのようです。

「うそだ！ そんなのただの水なんでしょー！」

「嘘じゃないわよー？ これはあんたが持ってた毒を、『私が』こつそり盗んできたものなんだから。そして、『私が』この毒を先生に飲ませたの。だからあんたも強がってないで、自分が使いもしない毒を集めてただけの根暗女だつてことを認めちゃいなさい」

刑事さんたちの視線は二人の間を行き来しています。

「わ、私はキレたら何するかわかんないヤツだよ！ 先生だつて、ム力つくから殺してやったの！ あいつクサイしー！ 死んで当然だしー！」

「そんなに言うんならあんた先生の家知ってるの？」

「えっ？」

「先生は自宅で毒を飲まれたのよ？ だつたら犯人は当然先生の家を知ってるはずでしょ？」

「し、知ってるよー！」

「どこ？」

「あ、そ、その、それじゃああんたは私の家知ってるの！？」

「ハア？」

「あんた私の家から毒盗んだんでしょ！ 知らなきゃ盗めないじゃないー！」

「あんたバカだねー、現にこうして持ってんじゃないの、ここに」

「水だもん！ それ水だもんー！」

「じゃあ刑事さん鑑識呼んで！ 鑑識！」

「うあああああー！」

突然毒島さんが川崎さんに飛びかかり、事態はとうとう取っ組み合いの喧嘩に発展しました。止めようとした記録係さんの腕を振り払いざまに鼻にヒジを打ち込みつつ、毒島さんは叫びます。

「殺してやる！ 私はキレたら何するか分からない奴だからお前も殺してやるぞ！ 先生みたいに！」

「上等よ、本物の殺人鬼の恐ろしさを思い知らせてやるわ！」

毒島さんは体は小さいけれどガッツがありました。口では勝てない代わりに喧嘩では少しばかり押しているようです。

相手に馬乗りになった毒島さんは、薄い色の口紅が綺麗に塗られた唇に右手親指を突っ込んで頬の肉をつかみつつ、左手を長い髪に伸ばします。川崎さんは頬の防御を捨ててこれを抑えますが、両手でもどつやら毒島さんの体重の乗った攻撃を支えきれません。両足も共にしっかり封じられています。

「うぐぐ」

押し負けそうになったところ、ようやく刑事さんたちに引き剥がされ、ひとまずその場は収まりました。

「あ、あなたなんか……」

ボタンが飛んで胸のほだけた川崎さんが、髪を振り乱し口紅も唾液で伸びた色気もない格好で毒づきます。

「あなたなんか先生を殺す理由があるっていうの！？」

毒島さんは顔を真っ赤にして、涙をぼろぼろこぼしながら叫び返します。

「理由なんか知らないよ！ じゃああなたの理由はなんなんだよ！」

「私は……！！」

気がつくとも川崎さんも泣いていました。せつかく化粧でごまかした涙の跡をさらに上書きしています。ああ、さっきもう枯れたと思っただのに、まだこんなに残っていたなんてと川崎さんは自分でも驚きました。

「私は先生に……」

何か言おうとした川崎さんを、刑事さんが手で制しました。そして「やめなさい」と言いました。

それから、川崎さんにだけ聞こえるように耳元で続けます。

「私達は、武田浩二の自宅から、いくつかの『写真』を押収しているね、実は、もう大体の事情がつかめているんだ。君は友達思いのいい子じゃないか。あの子に心配をかけるようなことは言わなくて良い」

「……」

川崎さんは口をつぐみました。毒島さんが、荒れた呼吸をなんとか整えながらその様子を不安げに見守っています。記録係さんや女性職員さん、川崎さんを連れてきた人も押し黙って待っています。

「私達も鬼じゃあない、そして……実はそんなにまじめな警察官でもない。君がこれから心を入れ替え、友達を大切にして、罪を償っていくと誓うのなら、今回のことをうやむやにってしまうことも……できなくはない」

刑事さんはこの言葉を、特に小さく、誰にも聞こえないように言いました。そして、川崎さんもその声と同じぐらい小さく、首をわずかに揺らした程度に頷きました。

「……はは、全部処分したと思ってたんだけどな……」

「もう写真はこの世に残ってはいないよ、私達が全て処分したからね」

川崎さんは、顔を覆って大泣きしました。かすれた声でありがとうとつぶやきましたが、誰の耳にも届きませんでした。

それから刑事さんは、立ち上がって首をコキコキと鳴らしました。「……さて、今日はもう取り調べにならん。この子たちのうちに連絡して迎えに来て貰うことにしよう」

記録係さんはいと返事をして、携帯電話を手に部屋を出ました。「君たちももういいぞ。迎えが来るまでは自由にしていなさい」

そう言って刑事さんも部屋を出てしまいました。残った女性職員さんともう一人の男の人は、なんだかあきれたような顔でそれを見

送ります。

いつまでも床に座ったまま泣き続ける川崎さんに、毒島さんが歩み寄りました。

そしてなんだか恥ずかしそうに、そつと手を差し出します。

川崎さんは、その手を取って立ち上がりました。

「さ、行こうか……」

いつの間にか、今日だと思っていた日はとっくに昨日になっていました。

町は静かに眠っていて、はず向かいのコンビニだけが煌々と明かりをつけて落ち着かない様子です。

町が暗くなると空の星は輝きを増しました。遠くの山には三日月が突き刺さっています。

「寒いね……」

「うん、寒い」

二人とも、交わす言葉は多くありませんでした。ポケットに手を突っ込んだ状態で、お互いの肘が触れ合わない程度の距離になります。二人の背中の後ろには、警察署の正門があります。

「私ね……先生のことが好きだったの」

川崎さんがぼつんと、独り言のように言いました。

毒島さんはそれに対して、うん、と頷いただけでした。それ以上のことを何も聞こうとはしなかったし、それで十分だったようでした。

「ごめんね」

そう言って、川崎さんはうつむきました。

それからしばらくの間、二人とも一言も口を聞きませんでした。

「……ホントにひどいよ、ユウちゃん」

やがて、毒島さんが口を開きました。

「だって、私のこと毒島さんって呼ぶんだもんな。最初に言ったのに。『毒島さんと呼ばないで』って」

「……ご、ごめんね、キミちゃん」

「しょうがないなあ、許すよ。ユウちゃん」

警察署を出てから初めて、二人の目が合いました。

すると、どちらからともなく笑いがこみ上げてきて、二人して声の限り大笑いしました。とても長い間二人は笑っていました。

「あはははは……！」

「あはははは……！」

しまいには二人とも、おなかを抱えて地面に座り込んでしまう始末です。

「キミちゃん、やっぱりマスク無いほうがイイよ。かわいいよ」

「そうかな？ 私かわいい？」

「私ほどじゃないけど」

「あーっ、こいつ！」

二人の笑い声ははす向かいのコンビニから店員さんが何事かと顔を出すほどでした。

そうやってしばらく地面にうずくまってわらっていると、やがて道の向こうから車のヘッドライトが近づいてくるのが見えました。

「あ、お迎えが来たよ」

「ホントだ、ユウちゃんの方も」

二台の車が近づいてきて、それが毒島さんたちの前で止まりました。ドアが開いて、二人の両親が出てきました。

毒島さんのお母さんが、あんたは親に心配をかけてばかりで、と平手で娘の顔を打ちました。お父さんは黙っていました。

川崎さんの両親は、二人そろって娘の顔やら体やらを撫でまわし、大丈夫だったか、何も怖くなかったかと質問責めにあわせました。

とにかく早く娘を家に連れて帰ろうとするお母さんの腕を引く力に抵抗しながら、川崎さんは毒島さんに笑いかけました。

「じゃあ、また学校でね」

「うん！」

車に乗せられると、毒島さんも川崎さんも、糸が切れたように眠ってしまいました。

毒島さんのお母さんがあきれた声で、これじゃあ叱れないわね、と言いました。

二台の車は並んで、それぞれの家へ帰ります。毒島さんと川崎さんは、別々の車の中で同じ夢を見ていました。二人して寝坊して先生に怒られる夢でした。

ああいかん、これはきつと正夢だな、と、おぼろげな意識の中で二人は思いました。

第十九話 仲良くお迎え（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。これにて毒島さんは完結です。

わりとその場のノリで書いた作品だったので至らないところも多かったと思いますが、温かい目で見ただけだと嬉しいかなと…

…><…

というわけでまた、近いうちに、次回作でお会いしましょう。次も頑張るよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346c/>

毒島さんと呼ばないで

2010年10月8日14時56分発行